〔学術資料〕

『サントスのご作業』における聖フランシスコ伝
－現代語訳①－

St. Francisco's Biography as It Appears in *Santos no Gosagyō*
– Part One of a Modern Translation–

土　屋　有里子
Yuriko TSUCHIYA

Studies in Humanities and Cultures

No. 26

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷　26 号
2016 年 6 月
GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
JUNE 2016

〔学術資料〕

『サントスのご作業』における聖フランシスコ伝

―現代語訳①―

St. Francisco's Biography as It Appears in *Santos no Gosagyō:* Part One of a Modern Translation

土屋　有里子
Yuriko Tsuchiya

はじめに

1549 年、日本にキリスト教が伝来後、多くの宣教師たちが来日し、布教活動を展開した。やがて伴天連追放令（1587）や禁教令（1614）を経て、日本は未曽有のキリスト教大迫害時代に突き進んでいくが、そのような中でもたらされたのが、キリスト教の聖人伝である『サントスのご作業』[1]である。

通常、『サントスのご作業』と呼ばれる資料は二種類ある。ひとつは 1591 年、長崎県の加津佐で刊行されたキリシタン版『サントスのご作業のうち抜書』（以後、活字本）である。いまひとつは、マノエル・バレトによって書写された通称バレト写本『サントスのご作業』[2]である。両書は部分的に共通する聖人を扱いつつも、独自の内容を多く含んでいる。活字本には 31 編、バレト写本には 32 編の聖人伝が収められているが、共通する聖人伝が 17 編、活字本のみに確認できるものが 14 編、バレト写本にのみ確認できるものが 15 編ある。両書を合計すると、全 46 編の聖人の生涯が通観できるということである。

本稿で対象とするのは、活字本に収録されているアッシジの聖フランシスコ伝である。現ローマ教皇がこの聖人への思慕から初めて「フランシスコ」の教皇名を名乗っていることは記憶に新しいところであるが、フランシスコ伝は活字本独自の内容であり、バレト写本には確認できない。日本で刊行された活字本オリジナル記事である上に、その記述内容が多分に日本的な言葉を多用した独特のものであり、詳細な検討が必要と思われる。

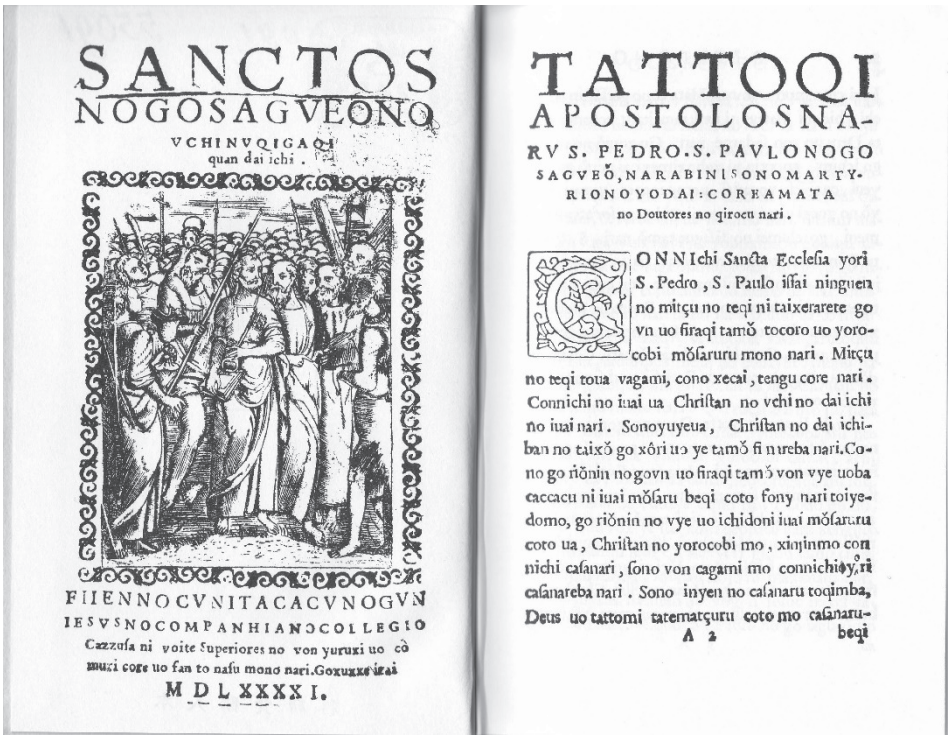
原文から日本語翻刻、現代語訳へ

活字本の本文は、〈図１〉に示したとおり、ローマ字表記である。読者が活字本の聖人伝を理解しようとするとき、まずはローマ字表記を日本語翻刻し、それをまた現代語に訳すという作業が

---

[1] サントスは聖人、ご作業は伝記、生涯の意味である。
[2] 現在ヴァチカン図書館に所蔵されている。第一部から第四部に分かれ、第四部が聖人伝に該当する。1591 年に書写されたとされる。

必要となってくる。例としてフランシスコ伝の冒頭を揚げると次のようになる。


SANCTOS
NOGOSAGVEONO
VCHINVQIGAQI
quan dai ichi.

FIIENNOCVNITACACVNOGVN
IESVSNOCOMPANHIANOCOLLEGIO
Cazzuſa ni voite Superiores no von yuruxi uo cõ
muxi core uo fan to naſu mono nari.Goxuxxo izai
M D L XXXXI.

TATTOQI
APOSTOLOSNA-
RVS. PEDRO.S. PAVLONOGO
SAGVEŎ,NARABINISONOMARTY-
RIONOYODAI:COREAMATA
no Doutores no qirocu nari.

ONNIchi Sancta Eccleſia yori S. Pedro, S. Paulo iſſai ninguen no mitçu no teqi ni taixerarete go vn uo firaqi tamŏ tocoro uo yorocobi mŏſaruru mono nari. Mitçu no teqi toua vagami, cono xecai, tengu core nari. Connichi no iuai ua Chriſtan no vchi no dai ichi no iuai nari. Sonoyuyeua, Chriſtan no dai ichiban no taixŏ go xôri uo ye tamŏ fi nureba nari.Cono go riõnin no govn uo firaqi tamŏ von vye uoba caccacu ni iuai mŏſaru beqi coto ſony nari toiyedomo, go riõnin no vye uo ichidoni iuai mŏſaruru coto ua, Chriſtan no yorocobi mo, xinjinmo connichi casanari, ſono von cagami mo connichi casanareba nari. Sono inyen no caſanaru toqimba, Deus uo tattomi tatematçuru coto mo caſanaru-
A 2 beqi

〈図１〉『サントスのご作業のうち抜書』表紙[3]

【原文】

Yo ua guiŏqini voyobuto iyedomo,von tasuqete no go fiquan naru Francisco no vye ni Deus no Graça cacayaqi tamŏ to miyetari.

【日本語翻刻】

<u>世は澆季に及ぶと雖も</u>、御扶け手のご被官なるフランシスコの上にデウスのガラサ輝き給ふと見えたり。

【現代語訳】

この世は次第に終わりに近づき衰えていくが、神のしもべであるフランシスコのうえには、神の恩寵が輝きなさっていると思われる。

3 『Sanctos No Gosagveo No Vchi Nvqigaqi サントスのご作業の内抜書（キリシタン版精選）』（雄松堂書店 2006）より。

日本語翻刻の文章を見ると、独特の言葉が使われることに気付く。例えば「世は澆季に及ぶと雖も」という言葉は、日本古典文学の軍記物である『保元物語』、『平家物語』、『太平記』等に見られる言葉であり、特に『太平記』において多用されている。キリシタン版の『平家物語』や『太平記抜書』が現存していること、またロドリゲスが『日本小文典』の中で、「この日本で最も荘重にして崇高な文体[4]」として『太平記』をあげていることも鑑みれば、当時の宣教師や日本人キリスト者たちが学習用として用いた日本古典文学作品の表現が、聖人伝の翻訳に使用されていることも肯ける。

以上のように活字本『サントスのご作業』の本文解釈は、単に日本語翻刻をするのみでは難しい側面が多々あり、正確な内容把握のためには、日本古典文学作品の表現と仏教語の知識を総動員する必要がある。そしてその理解のもと現代語訳をおこない全体的な内容の把握が容易になれば、典拠と思われる西欧の聖人伝との比較考察が進展するのである。日本人がキリスト教を受容していくにあたり、そのまま受け入れたもの、反対に日本的な変容をせざるを得なかったものは何なのか、キリスト教伝来初期の問題を考える際に、現代語訳を介した比較考察は大きな意義を持つものと思われる。

以上のような問題意識のもとで、本稿と次号の二回にわたり、活字本に収録された聖フランシスコ伝について現代語訳を行う。原文はイタリアのマルチャーナ国立図書館蔵本（雄松堂書店 2006）の影印に拠り、現代語訳に際して依拠した日本語翻刻は、キリシタン文学双書『サントスのご作業』（尾原悟編著　教文館　1996）である。同時に『サントスのご作業　翻字・研究篇』（福島邦道著　勉誠社　1979）も適宜参照した。

〈現代語訳〉[5]

聖フランシスコ会の開山太祖　聖フランシスコの御生涯。
これは、聖ボナヴェントゥラと、聖アントニノの記録に見えるものである。

①この世は次第に終わりに近づき衰えていくが、神のしもべであるフランシスコの上には、神の恩寵が輝きなさっていると思われる。慈悲の御親でいらっしゃる神の大いなるご恩が、この聖人を世界の闇から真実の光へと導くばかりか、あらゆる善をもって霊的に高い位に上げなさったのである。

②このすばらしきフランシスコは、イタリアのアッシジの住人で、1182 年に生まれた。父は財力のある商人だったが、血筋のよい人であった。母は家柄がよく信心深い人であった。洗礼を授け

4 『日本小文典』上「日本語の学習と教授にふさわしいと思われる方法について」*4

5 現代語訳における①～㉕の段落番号は、後の考察のために、私に付したものである。なお、本稿は、JSPS 科研費（15K12851）の成果の一部である。

られた時、母の意向でジョアンと名付けられたが、キリストの秘跡を授けられて、フランシスコと改名なさった。人によっては、フランス語を簡単に習得なさったので、フランシスコと名付けられたということである。
③母がフランシスコを出産するに臨んで、難産で大変な腹痛に苦しんでいた時、門に修行者が一人来て物乞いするので、下女が出て行って物を与えた。その修行者が、「今難産で苦しんでいるお方が厩にお出でになれば、安産となるでしょう」と言って去ったので、そのようにしたところ、安らかに出産された。この恩を忘れないために、その跡地に礼拝堂を一つ建立して今に至るという。これはイエス・キリストの御親しみのしるしである。ご自身が厩でお生まれになったが故に、このように計らいなさったと思われる。
④そうして、フランシスコは長男であったので、一家を継ぐために育てられ、成長なさってからは、まずフランス語を習い、次にラテン語もほぼ習得なさった。その後は、父の商売に従って、あちらこちらを行ったり来たりしていたが、貪欲や虚栄心のうずまく世界の中でも、神がフランシスコの心中に教えなさった望みの種を傷つけることは、悪魔も出来なかったのである。それ故、若いときから、周囲の友人達が世の戯れ事を楽しむ中にあっても、最高の貞潔をヨセフのように慎み守られたのである。様々な商人たちと関わり合う中でも、非道非法な利益をたくらむことなく、イエス・キリストが貧しい人に向けられたような慈悲の心を失うことはなかったのである。生まれもっての憐れみの心を決して曲げることはなく、この慈悲の心は幼少の時からあったが、成長するにつけ増していき、神の愛に対して人が物を乞うとき、拒むことはなかった。
⑤ある時、商売にまぎれて、神に対して御慈悲を乞う貧人をそのままにしておいたが、その貧人が去った後、貧人を放置し、そのまま帰してしまったことを悲しみ、自分で自分を深く責め、「私は何て冷酷な人間なのか！誰であっても私の知り合いが物を乞いに来たならば、万事をとどめて、使者にも会い、物を与えて帰さなければならないのに、神の御使いをそのまま帰してしまった」と言って、貧人を捜し出して赦しを乞い、物を与えて帰し、今からこのような油断がないように、「神に対して物を乞う者には決して断るまい」と願をお立てになったのであった。まだ在俗であった時も、神の愛の言葉を聞きなさる度に、心を動かさないということはなかった。

⑥そのうち聖人の住む町と隣の町の人々が争いをおこし、聖人の町の者たちと聖人を生け捕りにして、一年ほど閉じ込めるということがあった。牢にいる間も、その苦難をこらえて、心の底に深い喜びの気持ちを持っていらっしゃったことに、人々は驚いた。そのうちまた、「こんな苦難に遭遇して喜ぶのは、愚鈍の証拠だ」と中傷されて、「どうしてこの苦難を悲しみましょう？これ以上の喜びはありません」とおっしゃり、牢にいる他の者たちにかいがいしく仕え、心を寄り添わせておられた。そうしてこの牢から問題なく出られて、もともと人付き合いが良かったので、皆から愛され、何を為すこともなく 25 年の歳月が過ぎていった。心中には神の愛の火の粉が少しあったけれども、虚栄心と財宝に取り紛れ、それらが障害となって、神の秘密の計画と神の事柄を洞察するために召されていることもまだ知らなかった。

⑦そこで慈悲なる御親である神からの厳しいお叱りの表れとして、長く大病を得た。これに大いに驚き、この病気が治ったら、神へのご奉公に我が身すべてを捧げようと深く心に誓われたのだった。神はこの世界で特別に愛される者に愛の煉獄を与えられ、手厚く扱われるようだ。それをよく堪え忍べばそのかいがある。そうなると病気ほど学文教化のために有効な手段はない。

この尊きフランシスコは、神より与えられた病気をこの上ない宝と思ったがゆえに、それより病は天にのぼるための題目となったのである。

⑧そうしてフランシスコの病は快癒し、その魂は強いものとなった。ある貧しい騎士が、破れた衣装を着て恥ずかしく思っているところに行き会って、傍に呼び、自分の着ている衣装を与えた。自分は騎士の古い衣装をもらって身に纏った。その次の日の夜の夢に、フランシスコは大きな広間を見た。その中には色々な武具が飾り立ててあり、それぞれの上には十字架の印があった。イエス・キリストが立っておられて、「十字架の旗を強い心で受け取り、私の跡を慕ってくるならば、これらを全てお前とお前に従う騎士たちに与えよう」とおっしゃった。その時から、聖人は激しく内省し、人のいない所に度々出て行って祈祷し、ため息をつかれていた。祈祷に叶う、最善の道を見せて下さるようにと、イエス・キリストを常に頼みになさっていたのである。

⑨ある時、祈祷をしていて、主なるイエス・キリストが十字架にかかっていらっしゃるお姿が見えたので、すぐに我が身を捨て、十字架を担ぎ、キリストの御跡に続こうと、大いに改心された。神の愛の火によって聖人の霊魂は燃え上がったのである。またキリストの御受難を思い出すことも、同じように心中に深く染みこんでいたので、智慧の眼で常にイエス・キリストの五つの御疵を拝見し、それ以来涙を止めかねていた。

⑩ある時、聖ダミアーノ教会に参詣して、十字架像の御前で謹んで祈祷していると、「さあフランシスコよ、私の破壊された教会を修理しなさい」との御声を三回聞き、その教会が老朽化しているのを再建しなさい、とおっしゃったのだと理解した。しかし、このお言葉の真意は、イエス・キリストの御血によって贖われた全てのキリスト者のことだったのである。聖人は、持っている財産をすべてなげうって、その対価を教会の司祭に与えたけれども、司祭は聖人の父のことを考えて受け取らなかったので、司祭の足元に金を投げ捨てて去った。父はこのことを聞いて、司教の御前で嫡子の権限を取り上げるとは公言できず、聖人を捕らえて牢に入れた。そうして、司教の前でその是非を糺されて、聖人は嫡男としての立場を放棄すると宣言するだけでなく、着ていた衣服までも脱いで父に返した。その時、苦行用の毛のシャツを着ていることもわかった。聖人は父に向かって、「今までこの世であなたを父と呼んできました。これからは天にいらっしゃる御父を頼みにし、お仕えすることに徹します。この天の御父に私の持っているものを全て捧げ、私の全信頼を悉くこの御父に捧げます」とおっしゃった。司教は、そのこの上ない神のしもべの熱意をご覧になって、座っていた腰掛けから降り、聖人を抱きよせて、ご自分が着ていた衣装で聖人の肌をお隠しになり、従者に、聖人のために衣装を持ってきなさい、とおっしゃったところ、貧しい農民の衣装を持ってきた。聖人は至宝を仰ぐようにその衣装に抱きつき、大きな喜びをも

って受け取られ、十字架の形に立って身につけられた。
⑪そうして世の中を厭い、世間の欲望から退かれて、それまでの住居を捨てて、人のいない山林に分け入りなさった。これは、そこで神の訪れを心中に感じるためである。聖人が山道を主を賛美する歌を歌いながら歩いていくと、盗賊に出くわした。いかにも非情な様子で、「お前は誰だ」と問われて、聖人は大きな自信をもって、預言者のように、「私こそ偉大な王である神の大事に先立つ使いである」と答えたので、盗賊らは非常に怒り、聖人を散々に打ちのめして、雪の積もった穴に投げ込み、「愚かな神の先触れのようにそこにいろ」と言って去った。聖人は彼らが帰ると見るや、穴から出られて、大変喜んで、大声で神を賛美する歌を歌って行った。そうしてその辺りの山寺に入って、食べ物を乞われたけれども、誰も知り合いがいなかった。そこからエウグビヨという所へ行くと、知り合いに気づかれて、その人から貧者の古い衣装をもらい、御身を隠されたのである。その衣装を二年間替えることなく、道心者のように常に杖をつき、靴と粗末な帯をまいていらっしゃった。
　神のしもべとしての精神を鍛え上げるために、深く広い基礎を築きたく思ったので、外的活動と隣人への愛と苦行のみを行い、自分の身を苦しめなさった。それは余すところなく自己愛を貫き、その身の愛を御主イエス・キリストの愛と、隣人愛にそのままあてたものであった。

⑫聖人は俗人であった時、癩病人を非常に嫌ったので、神の愛により力を授けられてからは、多くの癩病人に使われようと思い立たれた。癩病人のいる所へ度々行き、必要なものを調達して与え、イエス・キリストの愛のもとに、癩病人の手足や顔を吸われた。瘡を洗い、膿をもぬぐいなさった。このことから、魂と肉体の病をも治す力を持つ善人として、神から認められたのである。
⑬ある時、聖人は寒空の中、破れた薄い衣装で教会に行き、ミサに臨まれた。兄弟が同じくそこにいて、軽蔑して、「お前は汗を売るのか」と人に言わせた。すると聖人は喜んで、「私の全ての汗は高い値で神に売りました」とおっしゃった。ある時、聖人は神に、「どのようにすることが、ご奉公になりますでしょうか」とお尋ねしたところ、「苦いものを甘いと思い、自分自身を卑しくせよ。それが私への奉公になるだろう」とおっしゃった。
⑭ある時、使徒たちの（祝日の）ミサが行われるのを、深い信心をもって聴聞なさっていて、イエス・キリストが使徒にその生活様式について定められた福音書が読まれるのをお聞きになった。その決まりに、「説教をしに行くような時は、金銀や大きな袋を持たず、着の身着のままで、靴も履かず、杖もつかないでいきなさい。どこの宿でも泊まるときには、『神の祝福あれ』と言いなさい」との金言をお聞きになり、大声をあげ、叫びなさった。聖霊から大きな力を授けられたがゆえに、使徒たちのような生涯をお望みになるのは言うまでもなく、その思いを御身の衣装にも表しなさったのである。それゆえ、すぐに靴をぬぎ、杖を捨て、衣装はそのままで、腰に巻いていた帯を縄に替えて、袋も持たず、少し持っていた持ち物もすべて捨ててしまった。全ての世俗のものから心を解き放ち、喜ばれたのである。お聞きになった教えを固く守られ、その生活様式にも完徳を表しなさり、聖霊の火に燃えたち、悔悛を極めて公正を保つようにと各々に説教なさった。

⑮その誉と志をどこでもお聞かせなさったので、たくさんの良き人々が聖人に近づき、財宝や世俗を嫌って、へりくだりの粗末な衣装を着て、聖人の御弟子となられたのである。聖人は、三つの門派をお立てになった。一つは小さき兄弟会といい、観想と活動を通して説教する門派であり、二つめは聖女クララ修道女会の門派、三つめは贖罪者の門派である。
⑯貴きフランシスコはどこにでも赴かれ、大きな熱意と深い愛をもって神の教えを語られた。度々弟子の修道士たちに、「さあ兄弟たちよ、私と共に神へのご奉公を新しく始めなさい」とおっしゃるしきたりであった。ある人に雇われた者たちが、お互い話ばかりしているのを聞いて、雇い主が、「ほらもう、おしゃべりをやめなさい。話をしていないでしっかり働きなさい」と言うのをお聞きになって、門下の弟子たちに、「さあ兄弟たちよ、たった今雇い主が言ったことを聞いたかどうか。神も私たちにあのようにおっしゃっておられるのです。それは、私たちも行動しないで、言葉ばかりを発しているからです」とおっしゃった。聖人は祈りの度ごとに、「わが神よ、わがすべてよ」とおっしゃった。これは「わが神よ、わたしの全てはあなたのものです」という意味である。
⑰ある時、お供の修道士ただ一人を召し連れて、説教しに行こうとおっしゃり、ある場所に人々を集められて、少しずつ神の御事を語られて、「ミサを聴聞しなさい、告白をしなさい、偽りの誓いをしてはいけない、父母に孝行を尽くしなさい、少しでも祈りなさい」とおっしゃって帰りなさった。また別の場所に行ってもこのようにおっしゃって、修房に帰られたので、お供の修道士が、「神父様、どうして御説教をなさらないのですか」と聞くと、「私はすでに三回説教をした。説教壇に上ったり、椅子に座って説教するのみに限らず、いつでも神の御事を隣人に聞かせ、神が御子イエス・キリストをお授けくださったことを語ること、それが説教である」とおっしゃった。この貴き聖人が門派の修道士たちにお命じになったのは、「来世の苦楽、善悪のことを言葉は少なくても万民に知らせるように」ということであった。
⑱ある時、道を行き、くたびれてしまい、驢馬に乗りなさったところ、お供の修道士の中にいたレオナルドという、アッシジの騎士の家系の修道士が一人、徒歩で従っていたのだが、心中で、「自分の父は高貴な家の子孫で、このフランシスコは商人の子なのに」と聖人を軽んじていた。聖人は、預言の力によってこれを知り、驢馬から降りて、「さあレオナルド、あなたは徒歩でいくのは似合いません。あなたは高貴な家の生まれで、私は下賤の家の子ですから」とおっしゃった。そこでレオナルドは心底驚き、聖人の御足元に跪き、お許しを乞われたのだった。

⑲ある時、過越祭の日、聖人は門派の寺におられた。そこで食堂を見ると、美食をととのえ、飯台の上にはきれいな手拭いとすばらしい水晶の食器などが置かれていた。聖人はそこから離れられて、貧人の衣装を着て、顔を隠し、杖を突き、その食堂の入口にいて食べ物を乞われた。ある修道士が「中に入れ」と言ったので、すぐに入り、土の上に座り、人からもらった物を取り、鉢さえも灰の上において食べておられた。やがて聖人であることに皆が気づき、とても驚いたので、聖人は姿を現し、「あなた方が門口に立って、慈悲を乞う貧人のようにすることはまったくなく、

あらゆる宝で己を満たし、裕福な人のようにしているのを見て、ここから出て行ったのだ」とおっしゃった。自分にも他人にも貧しきことを大切にされ、貧しさを女帝と呼びなさった。ご自分よりも貧しい人を見ると、それを羨んで、「自分はこの人に負けた」とおっしゃった。
⑳ある時、道で非常に貧しい人にお会いになり、「私は貧しさを自分の主人か、至宝かと選び取ったけれども、この人は私よりも貧しく、私は負けた」とお供の人におっしゃった。お供の人が、「衣装は確かに貧しいですが、心中ではきっと金持ちになりたいと思っているでしょう」と言うと、聖人は大変怒り、「あなたの衣装を脱いで貧人に与え、その足下にひれ伏し、邪推をお許しくださいと言いなさい」と命じなされた。供人は仰せの通りにしたそうである。
㉑ある時、衣装も、顔つきも全く同じような女性三人と出会ったところ、その女性たちは一斉に「尊いご主人なる貧しきお方、ご無事にお過ごしください」と言って、見えなくなったということだ。

㉒聖人の弟子にシルヴェストロという人がいた。この人がまだ聖人の門下に入る前、ある夜、縦は天のはるか遠くを、横は一天四海の広さを包み込んだ金銀の大きな十字架が、聖人の口から出るという夢を見た。それ以後、彼は俗世を嫌い、聖人をお慕いし傍に付き従うようになった。悪魔が三回、聖人に呼びかけて、「過酷な悔悛をして自らの身を殺してしまうような者に、神はその罪をお許しにならない」と言った。これは聖人の悔悛への熱意を生ぬるいものにしようという誘惑であった。悪魔はこのやり方では聖人を翻弄することはできないと思い、その後また、しきりに淫乱の誘惑を聖人に起こさせた。聖人は淫欲を感じると、裸になり、我が身を折檻して苦しめた。自分の身に対して、「お前は驢馬だ。折檻されるにふさわしい者だ」と言い聞かせた。しかしこれでも猶妄念が尽きなかったので、霜がおり、雪が降る寒い時節であったにもかかわらず、丸めた雪を大小あわせて七つ作り、大きいものを妻、小さい二つを息子、また小さい二つを娘、もう二つを下女と下男と名付け、裸になって、寒風吹きすさぶ雪深い中、「妻や家族は、ここで凍え死んでしまうだろう。だから着物を着せてやれ」と言って大きい雪玉に抱きついた。そして、「お前がもしこんなに大勢養育できないと思うならば、ただ唯一の御主、神に仕えよ」と何度も何度もかき口説いた。悪魔はこの方法でも聖人を籠絡することが出来ず、その妄念は止められた。そうして聖人は修房にお帰りになり、神に御礼を申し上げたのだった。
㉓ある時、枢機卿の懇願に応えて、彼の館にご滞在になったところ、悪魔が来てひどく打ちのめすことがあった。聖人は後にそのことを仲間にお話になり、「悪魔は人を成敗する神の騎士である。私が過ちを犯して打たれるのは当然のことである。その過ちというのは、他でもない、私が枢機卿のところに留まり、彼が私を丁重に接待するのを、私の弟子たちは貧しい修道士であるから、悪いお手本となってしまったことである」と言って、早朝起きられて、家にお帰りになった。
㉔ある時、祈りを捧げておられたところ、家の屋根の上に悪魔が集まって、騒がしくするのをお聞きになって、すぐに外へ出て、十字架を唱えておっしゃった。「悪魔よ、全能の神の御名のもとに、お前に命じる。私に対して神より許された限りの害をなせ。私は私以上の敵を持たないから、

お前が私を責めれば、私は私に勝利するからである」。このようにおっしゃると、悪魔はすぐに消えた。俗世を捨てられてから、六年目に、殉教をしたいというお気持ちから、シリヤという異教徒の国に赴き、大きな信心をもって説教なされた。その場所の主人は説教を聴聞して、聖人に礼を尽くし、元の在所に帰した。それゆえ殉教の望みを叶えることはできなかったのである。

㉕ある時、ローマで、聖人と聖ドミニコとオスティアの枢機卿と三人で話をしている途中に、枢機卿が、「どうしてあなた方の門派の修道士から司祭を決めて、すべての人をお助けにならないのですか」と問われた。二人はともに返答をためらっていたが、聖フランシスコは最後まで謙遜してお答えなさらなかった。聖ドミニコは素直に、先に返事をして、「私の一門の修道士は分別があり、すでに高位にあるのです。私の知る限りでは、司祭になるような者はいないでしょう」とおっしゃった。その後、聖フランシスコがお返事なさり、「私の一門の修道士は偉大な者になるような者ではないので、「より小さい（兄弟会）」と名づけたのです」とおっしゃった。

（以下、次号）